朝の光

槙　尚子

この数か月間、私はすっかり落ち込んでいた。今までのことを一つ一つ否定したくなるような思いの中で、私はきっとけわしい表情をしていたにちがいない。

前夜からの激しい雨は上がったものの、清里の早朝はもやの中にあった。ここは八ヶ岳のふもと、宣教師によって開拓された清泉寮の近くの聖アンデレ教会。そこをお借りして小学校一年生は朝の礼拝を行った。

五十年以上も前に建てられた礼拝堂は、湿った空気の中でより一層こけの色を濃くしていた。清里の渓谷から若い人々の手で運ばれてきたという夥しい石が、講壇の奥に天井まで敷き詰められていた。

私たちの礼拝の後、聖アンデレ教会の司祭が挨拶された。

「ここでは毎日、朝と夕方の六時にお祈りの会をしています。今日も朝六時にしましたが、だれも来ませんでした。だから、一人で祈りました」

八ヶ岳の裾野に広がる清里高原は畑と牧場と森ばかり。この地で毎朝、礼拝堂に灯をと

もす司祭。人が来ても来なくても、早天祈祷会で祈り続ける一人の牧者。
「でも小学生のみなさんもお祈りしていることを知り、嬉しくなりました。今朝は私一人でしたが、ほかのところで共に祈っている人がいることを知りました」
私のために祈ってくれる人がいる—ふいにそんな気がしてきた。彼が何を祈ったかは知らない。しかしもしかしたら、『心がかたくななために疲れている人がいたら和らげてください』と祈ったかもしれない。だから私はこうして何事もなかったかのように生きているのだ。私の背後にある知らない人の祈り。堅い結び目がほぐれていくようであった。
講壇の右上方に、あかりとりの小さな窓があった。もやのために薄い光しか差し込まなかったが、その日の私には十分な光であった。